



いふだより

このたよりは、尾張旭市内の小中学生の子をもつご家庭や、
教職員のみなさん、地域の方に向けて発行しています。

第2号

「教育講演会」を行いました

8月6日（金）に、尾張旭市文化会館あさひのホールで教育講演会を開催しました。講師に小木曾健（おぎそけん）氏をお招きして、「正しく怖がるインターネット」をテーマに講演をしていただきました。

小木曾氏はIT企業でCSR部門の責任者を務める傍ら、書籍の執筆活動や連載、メディア出演などを通じて、「ネットで絶対に失敗しない方法」を唱え、情報リテラシーに関する情報発信を幅広く行われています。日本全国の学校・企業・官公庁で40万人以上、1,500回以上の講演実績があり、著書には「11歳からの正しく怖がるインターネット」（晶文社）、「13歳からの『ネットのルール』」（メイツ出版）、「ネットで勝つ情報リテラシー」（筑摩書房）などがあります。

軽快で熱く勢いのあるトーク。具体的な事例を交えながらわかりやすく、絶え間なくつながる小木曾氏のお話には、思わず時間が過ぎるのも忘れて聞き入ってしまいました。その中でも、特に印象に残ったものをいくつかご紹介します。

「ネットといじめは別」

「ネットいじめ」という言葉があるが、ネットといじめは別のものであり、「ネット」を使った「いじめ」と解釈するべきである。ネットの世界を現実へ置き換えることが、ネットを使いたいじめをなくしていくことにつながる。また、ネットを使っていじめに対抗することもできる。使い方次第で人を救うこともできる。

「一度揚げたら二度とおろせないボードを掲げている」

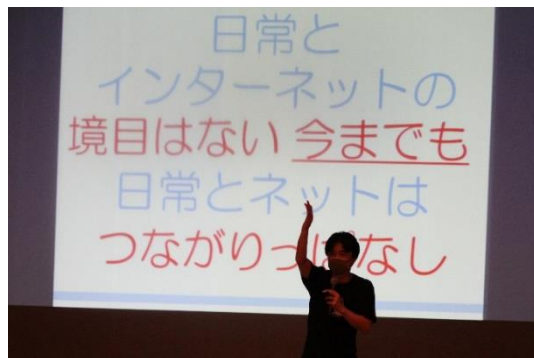
インターネットというものは、すべて家の外側であり、パソコンもスマホもメールもSNSも、ネットにつながっているものはすべて家の外側。ネットにものを書くということは、渋谷のスクランブル交差点のまん中で情報を書いたボードを掲げているのと同じこと。また、玄関のドアに個人情報を書き紙に書いてベタベタと貼っていくのと同じ作業であり、自宅玄関に貼れるものがネットへの書き込みの限界であること。日常でやってよいことはネットでもOK、そして日常でやらないことはネットでもやらない。日常＝ネット。

「今の振る舞いが5年後、10年後の自分を苦しめる」

炎上の賞味期限は、長くて2、3か月。しかし、何年も経てば忘れられてしまうから大丈夫というわけにはいかない。進学、就職、結婚などの人生の一大場面には、人は誰しも自然と注目されてしまうもの。世の中では、忘れ去られていたとしても、過去に炎上を起こしてしまった人は、大事な場面のたびに、誰かに見つけられ、自分の人生を邪魔されることになる。何度でも繰り返されることこそが、炎上の本当の恐ろしさである。ネットの最悪パターンを知った上で使用しなければならない。

「ネット炎上をスタートするために必要な人数は、たったの2人」

炎上はたったの2人で簡単に始められる。しかも、そのうちの1人は騒ぎの元になる投稿をした本人。2人目は、その投稿に気がついて、「自分がきっかけになって、炎上を起こせる。」とってしまった人。その人が、その投稿を掲示板やSNSなどの騒ぎが起きやすい場所に投稿するだけ。炎上が起きている時の人数の数は、1人→2人→100万人となる。



「地球上でつながらない人はいない」

炎上が始まると、初期段階でも100万人を軽く超える人たちが集まってくる。100万人とは「たくさんの人」という意味ではなく、「この人を知っている」と言える人間が、ほぼ間違いなく1人は含まれているだろうという数字。その裏付けとして、地球上の人間は、誰でも5人介せばどんな有名人でもつながってしまう…という理論がある。地球上の人間は、誰もがみな近い関係にあり、炎上となれば、身元が短時間で正確にわかってしまう。

「ネットに個人情報を書かなければ大丈夫？」

個人情報ではない些細な情報であっても、日記や居場所、日常の行動パターン、写真（位置情報付きでなくても）など、気を付ける必要がある。個人情報か否かではなく、自分が投稿した情報を、誰が見て何を考えるのか、それを載せる前に想像することが大切。その上でネットに載せるかどうかを自分で判断しなければならぬ。

「SNSの拡散による救命劇」

悪いことが多い反面、よいこともある。

2011年3月11日、東日本大震災の当日に投稿されたメッセージが446名の命を救うことにつながった。救援ヘリが、現地からの要請なくして飛び出すことはかなりの異例。

この講演会を通して、インターネットを普通の道具として使うために必要なこととは何かを考える貴重な機会を与えていただきました。GIGAスクール構想の進展により、本市でも児童生徒に1人1台のタブレットが貸与される中、子どもたちがインターネットによる被害者や加害者とならぬよう、情報モラル教育をより一層進めていく必要があると感じます。

教育講演会に参加した方々の感想

- 小木曾氏の話術が素晴らしくて引き込まれた。日常はネット、ネットは日常。日常生活での振る舞いと同一ように考えて、「玄関に貼れる」かどうか考えると、貼れるものはほぼないと思った。
- いじめにネットを使って対抗するという視点は今までもてなかった。こういったことをたくさんの方が知っていることで結果が変わることもたくさんあると思った。クラスでも学年でも話していきたいと思う。
- ネットの危険な点は分かっているつもりであったが、いろいろな事例を考えることでとても深いものだと改めて分かった。ネットと現実の違い（現実に置き換えること）が子どもの指導にも大切だと感じた。
- 普段何気なく使っているネットが使い方次第で自分の人生を大きく変えてしまうことが具体的に分かった。個人情報だけでなく、些細な情報を発信することも「玄関の外側」という考え方を基に、インターネットと付き合いしていきたいと思った。
- ネットによるいじめもネット炎上もネットと現実の同一性を理解していないから起きる。そんな当たり前前のことに気付かされ、ネットを使って対抗する方法も教えていただいた。大変有意義な時間だった。
- SNSを通じて悩んでいる子、いじめにはつながらなくとも、小さなトラブルになっている子もいる。インターネットを日常に置き換えて考えていくことや、事例を日頃から子どもたちに伝えていくことで、少しでも子どもの心に入っていくのかなと思った。とても参考になった。
- 現実とインターネット内のことを切り離して考えるのではなく、同じものと考えていることは大切であると感じた。現実ではできないことはインターネット内でもできないことを、子どもたちは理解できていないと思われる。そのため、人間としてどのように相手のことを考えるのか、人間力を育てることは、とても大切であると改めて感じる事ができた。
- ネット炎上で必ず個人情報が特定されてしまう理屈が大変分かりやすかった。人のつながりという点もそうだが、SNSのプロフィールや日記から個人が特定される仕組みは、ただ単に炎上したときだけでなく、犯罪に巻き込まれる可能性もあり、ネットに載せる前に「想像」することの大切さが分かった。
- 人生における大切な場面では、炎上が後を引くということにはすごく納得できた。自分もSNSとうまく付き合いつつ、子どもにも正しい付き合い方を伝えていきたい。

今年度も大変有意義な会になりました。参加できなかった方々も、本紙面や参加した方々から話を聴くことで、インターネットで失敗しない子どもたちを育てていくきっかけになればと思います。